



Hãf a A d a i

令和3年11月29日
グアム日本人学校
学校だより
12月号
校長 井手瑞樹

現行学習指導要領の考え方

我々人類は、他の動物に比べてはるかに高度な能力を持っています。確かに数々の猛獣より腕力こそ弱いですが、頭脳の高度さにかけては他と比較のしようがありません。長い長い人類の歴史の中で、脳を発達させ、それによって生き延び、より大きな社会を構成し、今や地球上の最強の生き物となったわけです。そこに、教育が重要な意味を持っていることはいうまでもありません。

人類の歴史からすると、学校というところで教育を施すようになったのはほんのごく最近のことと言えます。子々孫々受け継がれてきた文化・知見を計画的、系統的に次の世代に引き継ぐというのが学校教育の大きな目的の一つですが、1872年(明治5年)日本で学校教育が始まって以来、脈々とその思いは引き継がれてきています。ただ、その内容や方法は、当然ながら、少しずつ変化・発展を続けてきています。特に、小学校では令和2年度から、中学校では令和3年度から完全実施となった現行の指導要領では、それまでと大きく違った点があります。それは、コンテンツベースの学力観からコンピテンシーベースの学力観に変えることです。コンテンツベースの学力観とは、いわゆる内容重視の学力観、つまり「何を知っているか」ということです。一方、コンピテンシーベースの学力観とは、「何のために、何を、どんな方法で学ぶか」という、子どもたちを学びの主体に育てていくという学力観です。

現代は、情報量が莫大であり、また増える速度も以前とは比べものになりません。これを学校で教え続けることはもはや不可能に近い。したがって、子どもたちが将来にわたって自ら学び続けることが重要になるわけです。

私が若い頃読んだ、ある数学者の随筆の中に、数学の勉強法について書いてありました。その方は、数学の勉強すべき内容があまりに膨大であるため、次のような方法を考え、実践したということでした。それは、「パラシュート勉強法」とでも呼ぶべき方法であるということです。つまり、数学の本のあるページを開いて、そこに書いてあることに目を通す。これが空から降下する様子に似ているためパラシュートと名付けたわけですが、そこには、当然知らない部分、理解できない部分がある。そこで、それについて書いてあるページに戻る。しかしそこには、また分からない部分がある。そこで、さらに、そのことについて書いてあるページに戻る。それを繰り返していくと、ついにはすべて理解できるところに行き着く。すると、そこから最初に降り立ったところの内容までが、1本の線でつながるといわけです。

これは数学に限らず、学び方の根本を表していると思います。分からないときにはもどる、聞く、意見交換をしてみることなど、それが学習方法を考えたり、人と対話をしたりすることにつながっていくのだと思います。

したがって、学びの一手段として、コミュニケーションがあり、ツールとしての日本語や英語があると考えてはどうでしょうか。バイリンガルもいいですが、その前に、何のために言語を学ぶのか、子どもたちの学ぶ意欲を大切にすることが大事であり、数学や社会や理科など、その他の学ぶべきものはたくさんあります。言語学習だけに固執せず、「広く、人間としての成長を目指して学校で学ぶ」という姿勢を大切にしたいものだと思います。

